勃興期における蒙古人の信仰の広さと深さについて

高　原　武　雄

On the Faith of the Mongols in their Rising Time ; the Pervasion and Intensity of their Worship

Takeo TAKAHARA

It is believable that their faith played an important role among other causes that brought about the rise of the Mongols in the thirteenth century. The result of its discussion was written in "The Bulletin of Aichi Institute of Technology, 1968, Vol, 4" on the subject of "On the Faith of the Mongols in their Rising Time ; the Object and Contents of their Worship and the Existence of Heliolatry." Now, as the continuation and the conclusion of it, this report will be stated.

序

勃興期（12C後半から13C前半）における蒙古人の信仰はシャマニズム(Schamanism)であった．（「E」P.12—13「D」P.158—159）その当時における彼等の最高の信仰対象は騰格理—tengeri—であり，これに次ぐ信仰対象は合札児—γazar—で，皇天・天・上天・上帝・天の神，后土・地の神・地を意味した．その信仰内容は，騰格理・合札児の命への尊信であり，それの愛護・力添えへの信頼であったのである．（愛知工業大学研究報告 No. 4, 1968, P. 262, 263 参照）しかしながらこのような信仰の広さや信仰の深さは，ウラヂミルツオフもその著「蒙古社会制度史P. 112—115 において述べているように，13Cの蒙古人の間ではシャマニズム特に別乞 —Beki— の制度は，既に衰えかけていたと指摘しているところであり，稍々時代は下るが，世祖の時代にラマ教がこの民族の間にはいってから，彼等の信奉するシャマニズムは，これと混淆して大きな変化を見たように，流動的であったと思われるのである．従って彼等の信仰について，勃興当時のありのままの姿を究明することは，非常に困難なことであるが，蒙古勃興の原因を究明するためには，不可缺の要件であると思うのである．このような立場に立って，私は1968年愛知工業大学研究報告において「勃興期における蒙古人の信仰対象・信仰内容・太陽崇拝等について」述べたのであるが，彼等の信仰対象やその信仰内容もさることながら，蒙古統一に深い関連のあるものは，主としてその信仰の広さと深さであったと思う．従って本論はその継続研究であり又その結論として，これ等について研究の結果を報告し，彼等の信仰と蒙古勃興との関連を明らかにする．

史料としては，勃興当時の蒙古人の生活を生き生きと細かに画き出した点において「元朝秘史」ほどの文献はないので（ウラヂミルツオフ蒙古社会制度史P. 15—16）これを中心とし「親征録」・「元史」等この時代の重要史料によることとし，便宜上略記号を次のように用いる．

引用史料とその略記号

那珂通世著	成吉思汗実録,	1907	略号A
小林高四郎著	蒙古の秘史,	1941	略号B
白鳥庫吉訳	音訳蒙文元朝秘史,	1943	略号C
岩村　忍著	元朝秘史,	1963	略号D
小林高四郎著	ジンギスカン	1960	略号E
J.A.BOYLE 訳註 JUVAİNİ 著 THE HİSTORY OF THE WORLD-CONQUEROR		1958	略号F
	元　史		略号G
	親征録		略号H
C. D'OHSSON	蒙古史(田中萃一郎訳補)	1939	略号I
ウラヂミルツオフ著	蒙古社会制度史	1941	略号J
妹尾韶夫訳	リュブルック東遊記	1944	略号K
G. VERNADSKY	蒙古与俄羅西（札奇斯欽訳）	1955	略号L
H. HOWORTH "HİSTORY OF THE MONGOLS"	（文殿閣続印）	1938	略号M

なお音訳はすべて「C」によることとする．

I　信仰の広さ

(1)　騰格理—tengeri—の信奉者（その地理的広がり）

1206年成吉思(Cingis)は，東は興安嶺西はアルタイ山脈，北はバイカル湖のあたりからシベリヤに，南は万里の長城に

亘る広大な地域，すなわち全モンゴル高原に活躍するモンゴル系トルコ系諸部族をことごとく統一したのであるが，彼等の殆どが騰格理(tengeri)の信奉者であったことは，疑を容れる余地はないのである．諸家の学説や史料（のちにふれることとする）を綜合して考えるとき，客喇亦惕(Kereid)部(Naiman)については若干の疑問もあり，乃蛮部においてはいくらかネストリウス派のキリスト教徒とか，その他の宗教の信奉者が存在していたのではなかろうかと思われるので，検討を加えることとする．

まず「元朝秘史」について見るに，「秘史」はその冒頭より巻末にいたるまで騰格理(tengeri)崇拝の思想で一貫しているのであって，客喇亦惕(Kereid)部(Naiman)も乃蛮部もこれと異った信仰に生きていたという資料は見出し得ないのである．これに反して見出し得るものは，騰格理の崇拝者であったという資料である．客喇亦惕(Kereid)の部長王罕(Wan Qan)が乃蛮の可克薛兀(Kogsegu)撒卜喇黒(sabraγ)に敗れ，成吉思の四傑に救われた時の感謝の辞には「恩を報さんことを皇天后土の祐護知しめせ」と記している．（「A」巻5，P．191）明訳すなわち「C」巻5，34b—35a には「哈赤(恩) 合里兀勒忽冝(回的) 騰格理(天) 合札(地)命(的) 亦赫額勒(護助) 篾迭禿該(知道者)」とある．同様に王罕の騰格理への感謝の辞は，「A」巻5，P.198，「A」巻6，P．225，226「A」巻6，P．217にも見えている．又王罕(Wan Qan)の部下である必勒格別乞(Bilge Beki)の名が「A」巻4，P.146，「A」巻6，P．239，240に見えているが，別乞(Beki)は騰格理を崇拝する部族の族長の称号であるから，客喇亦惕(Kereid)部が騰格理を崇拝していたことを推定せしめるのである．又女性の美称であった別乞（親征録・元史は共に伯姬）の称号であるが，恐らくは騰格理を崇拝する部族のみが用いたものではないかと思われるのであるが，この仮説がゆるされるとすれば，「A」巻5，P．193，194，199に見える察兀児別乞(Caγur Beki)(親征録・元史抄児伯姬)は，王罕の子桑昆(Sengun)の妹であり「A」巻7，P．257，「A」巻8，P．345に見える亦巴合別乞(Ibaγa Beki)，「A」巻7，P.257に記されている莎児合黒塔泥別乞(Sorqaγtani Beki)（元史唆魯禾帖尼）は王罕の弟である札合敢不(Zaqaγambu)の女であることを思うとき，客喇亦惕(Kereid)部民の信仰が騰格理崇拝であったことについて，確信を深くするものである．

次に乃蛮部民(Naimon)の信仰であるが，乃蛮部族が人種的には土耳古系であったことについては，諸家異論のないところである．「秘史」は乃蛮部族が如何なる人種に属するかを明らかにしてはいないが，次に述べる資料から消極的ではあるが，乃蛮は忙豁勒種(Monγol)ではなかったと推定せられるのである．「A」7，P．265に「この東に些の忙豁勒(Monγol)ありと云はれたり．彼の民は老いたる大なる前の王罕を箭筒(やなぐい)にて，威して反らしめて死なしめたり．……中略……我等往きて彼の忙豁勒を持ち来ん」ほとんど同じ言葉は「A」巻7，P．268に塔陽罕(Tajan)の語として見えている．「C」巻7，P．11aに「額捏(這) 朶羅納(東) 啜額客惕(少的每)忙豁勒備(達達有)」とある．続いてその母古児別速(Kurbesu)の語として「A」巻7，P．266に「忙豁勒の民は気息悪しく衣服黒暗なりき」とあって，那珂博士は黒韃事略等を引いて詳しくこれを考証している．「A「巻7，P．292には成吉思が古児別速(Kurbesu)を問責する語として同じ言葉が見えている．「C」には巻7，P．11bに「忙豁勒(達達) 亦児堅(百姓) 忽訥(気)児(ヲ(有的每)) 卯兀壇(衣服) 忽卜察速(暗(有的每)) 巴剌禿壇(有来) 不列埃」とある．以上の例証より乃蛮部が忙豁勒系でなかったことは明瞭である．

次に彼等の宗教であるが，不亦嚕黒罕(Buiruγ)に関する記事である．彼は「A」巻4，P．144には古出兀惕乃蛮(Kucugud Naiman)（乃蛮の分部としている．「H」には盃禄可汗「G」には不欲魯罕としし「I」P.108には塔陽罕(Tajan)の弟としている）の首領であるが，闊亦田(Koiten)（「G」「H」闊亦壇）の戦の折彼と忽都合(Quduqa Zada)の二人は呪(蒙語札苔)を知っていたので，呪をしたところ風雨はひるがえって札木合(Zamuqa)の陣営に降りそそぎ全軍は潰えたのである．（「A」巻4，P．148）

忽都合(Quduqa)は斡亦喇惕(Oirad)の忽都合別乞(Quduqa Beki)であって，シャマンの族長であったことは明らかであるので不亦嚕黒罕(Buiruγ)が同様に，シャマン教の信奉者であったことは間違のないところである．しかしこのほかに乃蛮人の信仰について，彼等が騰格理(tengeri)の崇拝者であったという記録を「秘史」の中に見出すことはできないが，「A」巻7，P．263—264によれば塔陽罕(Tajan)の母古児別速(Kurbesu)(「H」菊児八速)は「王罕(Wan Qan)は前の老たる大なる罕なりき．彼の頭を持ち来よ．其ならば祭らん，我等」といい，豁哩速別赤(Qorisubeci)のところよりその頭を断ちて持ち来させ，首祭の祭を行ったことが見えている．この首祭のことは乃蛮の奇風であったので「秘史」の作者が綴ったのかも知れないが，キリスト教的でも回教的でもなく多分に原始的な風習のように思われるのである．

次に乃蛮人(Naiman)の信仰について「秘史」以外の諸伝説くところ必ずしも一致しないが，顧ることとする．カルピニ(Carpini)は1253年6月28日乃蛮国に入ったが乃蛮人を異教徒とし（「K」P.18キリスト教信者ではないという意味である）又リユブルック(Rubruck)は同P．95に「ネストリウス派のキリスト教徒であるところの乃蛮人が」としている．このことについてはロックヒルは注に「ナイマン人の信仰はウイ

グル人と同じで，摩尼教と仏教とをいっしょにして，それに少量の景教を加えたものだからリユブルックのいう偶像礼拝者でもあれば，基督教徒であると云える」(「K」P.18 ロックヒルの注）としている．

Juvaini 著 J.A. Boyle 訳注の「F」P.35 には，ボイルの注として客喇亦惕(Kereid)部を土耳古系の部族としキリスト教の信者としている．(His people, the Kereit, Perhaps of Turkish origin, were Nestorian Christians;……) 更に Boyle はペリオ(Pelliot)の説を引用して，乃蛮を蒙古化した土耳古人としている．(「F」P.41 An interesting distinction in view of Polliot theory that the Naiman, who inhabited the region to the west of the Khangai, were infact Mongolized Turks.)「I」P.79 には Rashid の説によって「客剌亦部の風俗慣習用語は頗る蒙古部に類似せり，この部族は基督教徒にして第十一世紀の初に当りネストリウス派僧侶の手によりて改宗せられたり」としている．

「E」P.13 には「ケレイトについてこれまでは人種的にはトルコ系と信ぜられて来たが，モンゴル系と見るのが正しい」としてナイマン部はトルコ系の中に入れている．宗教については「キリスト教（ネストリウス派）が神の福音をもたらすのは，まずトルコ系のオングット・ナイマン等の部族の間である」としている．又「D」P.103—104 には「ナイマン部はウイグル族と早くから接触を保っていた．トルキスタンのオアシス文化の恩恵に浴し，モンゴルの諸部族のうちで最も開化した部族であった．13世紀には，都市のウイグルの大部分はイスラム教徒になっていたが，一部にはキリスト教の信者の一派であるネストル教徒や仏教徒もおり，わずかながらも古代ペルシャのゾロアストル教徒やマニ教徒も残存していたらしい．ナイマン部人の間にもウイグル文化の影響をうけて，回教徒，ネストル教徒．ゾロアスター教マニ教徒もいくぶんか存在したのではなかろうか」としている．

従ってこれ等を綜合して考えるとき，人種的に見れば客喇亦惕(Kereid)部は忙豁勒(Monγol)種，乃蛮部は土耳古種，宗教上より見れば客喇亦惕(Kereid)部は騰格理(tengeri)の崇拝者，乃蛮部は忙豁勒人と同様に騰格理(tengeri)の崇拝者も多く，文化的にはウイグルの影響をうけて一部には回教・仏教・ネストル教ゾロアスター・マニ教徒も存在したものと思われる．

従って騰格理—tengeri—崇拝者の地理的広がりは，乃蛮部については多少の疑問は残るが，1206年成吉思が統一した全蒙古高原の全領域に及んでいたと結論づけても誤りはないであろう．

(2)　騰格理—tengeri—崇拝者の社会階層的広がり

騰格理の崇拝は当時王公貴族より庶民に至るまで，社会のすべての階級にしとしく及んでいたと思うのであるが，「秘史」に描かれている蒙古の社会は（11世紀—13世紀）階級身分の分化が見られ，支配階級である貴族と被支配階級である平民と奴隷とに分けられる．ここで彼等の信仰を伺う資料は，そのほとんどがその支配階級のものである．すなわち罕や族長に限られている．庶民の信仰について伺うものとしては，Carpini や Rubruck の旅行記に依らねばならない．まず「秘史」に現れる騰格理崇拝の言葉を述べた人々をあげると，阿闌媛(Alan Γoγa)(「A」巻1，P.12)，成吉思(Cingis)(「A」巻2，P.58，以下すべて「A」である巻数を省略する．P.83，101，119，211，235，259，302，304，305，333，340，342，344，405，576)．豁勒赤(Qorci)(「A」巻3，P.112)，札木合(Zamqa)(「A」巻4，P.148，巻8，P.311)，王罕(Wan Qan)（「A」5，P.191，巻5，P.198，巻6，P.225，226)，忽闌合敦(Qulan qatun)（「A」巻7，P.295)，帖卜騰格理(Teb tengeri)（「A」巻10，P.412)，三人の豁児赤(Qorci)（兵士）（「A」巻11，P.516)，巴禿(Batu)(「A」巻12，P.635) 以上であるが，その信仰内容については愛知工業大学研究報告 No.4. P.264—265に詳述した．

更に騰格理 — tengeri — 崇拝の言葉は述べていないが，騰格理崇拝者の族長を意味する別乞—Beki(Beki)—の称号を所有していた者は次の通りである．（注，「J」，P.112 にはシャマン教では魔術師＝酋長といふ意味のある「僧正」を意味したものであるとの結論に達する）としている．「A」，P.94 には別乞(Beki)は族長の称，「元史語解」には別吉・別乞は貴族女子尊称・貴族男子の尊称としている）撒察別乞(Saca Beki)（「G」・「H」薛徹別乞，「A」，P.114，126，136）合只温別乞(Qaziγun)（「A」，P.131，143，195，190）忽都合別(Quduqa)(「G」・「H」忽都花別乞「A」，P.114，148，149，398，401，406）必勒格別乞(Bilge)（「H」，必力哥別乞「A」，P.146，239，240）忽察児別乞(Qucar Beki)(「G」，「H」火察児別吉「A」，P.114）脱古思別乞(Togusu)（「H」，土居思別吉「A」，P.182）豁児赤(Qorci)（「A」，P.360 には別乞の称号が与えられたとある）又仮説ではあるが騰格理崇拝者である貴族女子の尊称と推定せられる別乞—Beki(Beki)—又は伯姫(Caγur Beki)の称号の所有者は察兀児別乞(「G」・「H」抄児伯姫「A」，P.193，194，199，200）豁真別乞(Qozin)(「G」，「H」火阿真伯姫「A」，P.193）亦巴合別乞(Ibara)（「A」，P.257，345）阿剌合別乞(Alaqa)(「G」，阿剌海別乞「A」，P.403）莎児合黒塔泥別乞(Sorqaγtani)（「G」唆魯禾帖尼「A」，P.257）の名が見えているので，罕や族長や族長の子女は勿論支配階級に属する那顔(Noyan)（諾延）達も等しく騰格理の崇拝者で

あったことが伺われるのである．しかしながら「元朝秘史」には庶民の信仰をうかがう資料は見えていない．（間接的に推測せられる資料とか，氏族の祭祀についての資料はある）先述したように Carpini や Rubruck の旅行記によれば，庶民達の風俗・慣習・信仰生活がうかがわれるのであるが，彼等はその風習と同じくその信仰では，篤く騰格理を崇拝していたことが推測せられるのである．（注「K」，P.37，52，56，63，72「I」，上巻P．63下巻，附録P.373—376参照）

以上述べたところによって結論づけられることは，騰格理 —tengeri— 崇拝者の社会階層的広がりは，王公から庶民にいたるまですなわち蒙古社会の全階層に及んでいたということである．

II 信仰の深さ

(1) 巫の力（晃豁壇事件）

晃豁壇事件は，「A」巻10，P.411—424によれば，晃豁壇の蒙力克額赤格（Munlig ecige）の七人の子の中に闊闊出帖卜騰格理（Kokocu teb tengeri）（闊闊出という神巫）があった．七人の兄弟が共謀して合撒児（Qasar）を打ったので合撒児はこれを兄の成吉思に訴えた．しかし成吉思が取りあげなかったので涙を流して去り三日も来なかった．そこが帖卜騰格理は成吉思に「長生の上帝の勅にて神告を宣へり「一次（たび）は帖木真（Temuzin）国を取れ」と宣へり「一次（たび）は合撒児を」と宣へり合撒児を図らずば知られずあるぞ」と讒言した．成吉思はこれを聞いてその夜兵を出して合撒児を捕え，袖を縛って，訊問しているとき，急を聞いた母訶額侖（Hogelun）は夜を徹して成吉思のもとに到り．合撒児の縛られた袖を解き放ち激怒して太祖を叱責した．太祖も漸く自己の非を覚ったのであるが，母の知らない間に合撒児の民を減じて僅か1400人とした．札剌亦児（Zalairu）の者卜格（Zebke）は驚いて巴児忽真（Barγuzin）に入って逃れた．（札不客（Zebke）は合撒児を補佐するために特に選ばれた部下であった）その後九種の方言のある民は帖卜騰格理の処に成吉思罕の聚馬所より多くの者があつまることとなった．

成吉思の弟の斡惕赤斤（Odcigin）那顔の部下が去って帖卜のところに行ったので，使者を遣わして取りもどそうとしたが使者は辱かしめられて帰ったので，斡惕赤斤は自から出かけて行ったが甚だしく辱かしめられた．そこで彼は明くる朝成吉思がまだ起きないうちに寝所に至って泣訴した．その時孛児帖（Borte）兀真は情理を尽して成吉思を諌めたので，太祖も決心を固めて斡惕赤斤に帖卜騰格理の処分を命じた．斡惕赤斤はやがてやって来た帖卜騰格理と搏ち合いこれを闕の外に引き出し，伏兵の三人の力士は帖卜騰格理の脊骨を折って誅した．斡惕赤斤は帳房の中に入って「帖卜騰格理は，我を懺悔せしめたりき．試みんと云へば肯かず欺きて臥したり．尋常の伴なりき」（注「B」には普通の友達だったと訳している）父の蒙力克は子の殺されたことを覚って「大なる土に土塊の然ありしより，海なす川に小川のしかありしより伴となれり，我」というと共に六人の子どもは一度に立ち上って，成吉思汗の袖をひいて迫ったので太祖は辛くも門の外に出で，箭筒士侍衛等は太祖を囲んでこれを護って．太祖は帖卜騰格理の屍に青い帳房を被わせて其処より車で立った．帖卜を被った帳房の天窓に蓋して門を圧えて守衛をおいて守らせた．三日目の払暁検証したが，帖卜の屍は失はれていた．そこで太祖は次の如く云った．「帖卜騰格理は，我が弟どもに手足を致したる故に，我が弟どもの間に跡形なき，讒言の故に上帝に愛まれずして，命を身ぐるみ持ち去られたるぞ」太祖は蒙力克額赤格（Munlig ecige）を責めて「子どもを性行を制せず，斉しからんと思へる故に〔禍は〕帖卜騰格理の頭に到りぬ」と述べ，恩賜をもって怒を息められたのである．そして帖卜騰格理を無くすと晃豁壇の顔色は消失せけるぞ」と結んでいる．

以上は晃豁壇事件の概略である．Juvaini も Raschid も「秘史」の作者もこの事件について記述するところ，その骨子は異っていない．Howorth（「M」,p.65）D'ohsson（「I」,107—108）も Raschid によってこの事件を太祖の第二次即位後に記しているが紀年を明らかにしていない．那珂博士は元史憲宗紀を引いて「A」，P．411に「歳戊辰十二月三日，生帝時，有黄忽荅部知天象者，言帝後必大貴，故以蒙哥為名，蒙哥華言長生也」として黄忽荅部は晃豁壇氏，天象を知る者は帖卜騰格理であって，戊辰は太祖の三年なり（1208年）としている．Juvaini は「F」P.39 に "In short, when these regions had been purged of rebels and all the tribes had becomes as his army, he dispatched ambassadors to Khitai, and afterward went there in person……" としているので，この事件は1208年—1211年の間に起ったものであろう．

「F」，P．112 では「この史譚は恐らく作者の文学的創作かもしれぬ．だがシャマンの政治への野望は，事実であったろうし，また他方，このころになるとモンゴル社会では，政治が宗教より優位に立ち，シャマンを王権に奉仕さすべき段階にあったことを示す伝承と見てさしつかえあるまい」としている．Vernadsky は「L」巻1，P.23において「森林居民之氏族長帰附後，薩蛮等対王権之拡張似乎有所不満，当時最有力権勢之薩蛮為蒙力克之子闊闊出……」として王権の拡張に対するシャマンの族長達の不満がこの事件の原因ではなかろうかと見ている．又「D」，P．159 には「テブテンゲリが天や精霊と交渉する能力を認めても，チンギス自身は地上の絶対君主として神巫などの客啄干渉を許さなかった」と述

べている．私はこの事件は「E」に述べられている作者の「文学的創作」と考えることはできない．勿論「A」に記するところ文学的な潤色がないとは思わないが，この事件は実在した極めて重大な事件であって「A」の作者はその真相を巧に表現していると考えるのである．しかし私はここではこの事件を当時の巫（Came 又はブゲ）の所有した権力は，政治的にも社会的にも時には王権をも凌ぐ強力なものがあったとする事例としてあげたのである．

(2) 拖雷（Tolui）の身代りについて

拖雷（Tolui）の身代りというのは「A」巻12，P．595—602に詳しく記載せられているが，1231年太宗は金国を征伐して大捷し，竜虎台に下馬したが，大病にかかって口舌の用を失うに至った．「師巫の占者に占はせたれば，乞塔（Kitat）惕の民の地水の主王だち（地主の神たち即山川の群神）は，人民住具を掠められ，城ども郡どもを壊られて厳しく祟れるなり」（注「B」訳も同じ）神告は親族のものから身替を出せば釈すということであったので，拖雷は進んで身替を申し出で，悲壮にも師巫に呪はしめ，その詛える水を拖雷は飲んで軈て歿した．なおこの事については「A」巻12，P．611—612に那珂博士は元史太宗紀および睿宗伝を引き Raschid 集史の記事を載せて詳しく考証している．

(3) 神告と罕位

「A」によれば成吉思合罕は二回にわたって罕位に上ったのであるが，第一次の即位は「蒙古源流」によれば1189年とし，第二次の即位は1206年である．（注那珂博士は成吉思汗の二回にわたる即位について「A」巻 8，P.315—316に詳細なる考証をのせている）「A」巻 3，P.112によれば，第一次の即位のとき豁児赤（Qorci）兀孫は次のように神告降下の様子を宣揚した．「皇天后土議り合ひて帖木真を国の主人に為れと云ひ，国を載せて持ちて来たり……」「C」巻3，P.38b—39aには「騰吉里（天）合札（地）児　額耶禿勒都周（商）帖木只泥（量）兀魯孫（人）額氈字（名）勒禿孩（行）客延（賓）……」としている．「A」の伝えるところによれば，この神告宣揚の効果は顕著なものがあったと見え，（国）（教）（的）（做）（庶）（道）札木合（Zamuqa）の部下も札木合のもとをはなれ続々と帖木真のもとに集り，部族長合議の上推戴して成吉思合罕と名づけたと述べている．なお「A」の伝えるところによると，第一次即位の前札木合と豁児豁納黒主（Qorqonaγ Zubur）不児に駐営していた時，木合黎（Muqali）にも「帖木真を罕とせよ」という神告が下ったと述べている．（注「A」巻8，P.340—341「木合黎（Muqali）に皇天の神告を告げ給へる言明なる故に」「C」巻 8，P.39b—40a「騰格理因（天）札阿鄰（的）札阿黒三（神）兀格（告）黍（了）帖昆（的）禿剌（言）」（明白的）（上頭））成吉思第二次即位後の恩賞には，豁児赤にはこの時の功勲を讃えて，約束の如く三十人の美女を選びて取れと勅し，林の民万戸を支配せしめ（「A」巻8，P．342—344）且別乞（Beki）の称号を与えて白衣を着し白馬に乗り群臣の上に坐らせたのである．木合黎には彼の軍功もあったが，神告宣揚の功によって国王の号を賜わったのである．（注」A」巻8，P.340—341）第二次の即位の時には，Juvaini によれば闊闊出（Kokocu）には次のように神命を伝えたと述べている．「God has spoken with me and has said: "I have given all the face pf the earth to Temüjin and his children and named him Chingiz-Khan.……"」「集史」D'ohsson, Howorth 共にこのことを載せているが，何故か「秘史」「親征録」には見えていない．闊闊出（Kokocu）はこの功におごって野望をおこし，晃豁壇事件によって誅せられたことは先述の通りである．

拖雷（Tolui）は神告を信じて詛（のろ）える水を飲んで死に，成吉思の第一次第二次の即位には神告の宣揚によって衆望を得て罕位に上った．特に第一次の即位には彼の信望も十分でなかった時であるので，神告宣揚の効によって衆望も高まり汗位に上ることができたのであろう．豁児赤や木合黎の恩賞もこれを十分に裏書きしている．第二次即位後における闊闊出（Kokocu）の野望も神告宣揚と深い関係があるのではなかろうか．そしてこの間の事情を端的に表明しているものは，札木慚悔（Zamuqa）の言葉であって，札木合は従者に捕えられて成吉思の前に現われたが，「A」巻8，P.31によると，彼は成吉思に勝たれた理由を数えあげた後「かるが故に上帝より命ある安荅に勝たれるぞ」と述べていることである．以上は神告のもつ絶対的な威力についてのべたのである．

む す び

以上は勃興当時（12世紀後半より13世紀前半）における蒙古人の信仰の広さと深さについて述べたのであるが，彼等の信仰すなわち騰格理崇拝者（tengeri）の地理的広がりは，乃蛮部においては多少の例外はあるにしても，1206年に成吉思が統一した全蒙古高原の隅々にまで及んだのである．又騰格理崇拝者は上は王公官人より下は庶民に至るまで全ゆる階層に及んだのである．云いかえると1206年に成吉思が征服し統合した全蒙古高原の人々が（乃蛮においては多少の例外はあるが）同じ信仰に生きていたのである．次にその信仰の深さに至っては，当時の巫の代表であったと思われる闊闊出（Kokocu）の権勢信望は，晃豁壇事件が示すように大罕の威権をも凌駕するほどであった．又拖雷（Tolui）の身代り第一次第二次即位における神告の

もつ社会的影響力は，吾人の想像を絶するものがあったのである．そしてこれ等の事例が示すように巫のもつ信望や勢力，騰格理—tengri—（皇天）の命（みこと）（札阿鄰（神告））がもつ魔力や威信も，要するに当時の蒙古人のように単純にして素朴な人々の「信仰の深さ」いいかえると「信仰心の想像することのできないほどの厚さと固さ」に由来するものではなかろうか．そしてこのよう「信仰心の広さと深さ」とが，どれほど成吉思の蒙古統一や戦争を勝利に導いたかは多言を要しないところである．換言すれば蒙古勃興の主要原因の一つであると結論しても当を失することはあるまい．同じ時代における十字軍の由来を考え併せるとき「宗教」否「信仰心」のもつ測り知ることのできない力を認識せざるを得ないのである．